

特 集

急性期 NPPV 療法

《巻頭言》

「急性期の呼吸管理は NPPV なしでは語れない」

山形大学医学部附属病院 高度集中治療センター 中根正樹

本号の特集では「急性期 NPPV 療法」を取り上げた。呼吸療法に興味を持ち始めたばかりの人から、すでに熟練している人まで、幅広い読者に有益となるであろう最新の情報が、臨床で活躍している各分野の第一人者によって執筆されているので、まずは一読いただきたい。

NPPV 療法に関して多くの臨床データを有し、強い推奨レベルが示されている対象病態には、急性心原性肺水腫、慢性閉塞性肺疾患（COPD）の急性増悪の2つが挙げられる。前者は日本医科大学付属病院の杉田先生に、後者は公立陶生病院の横山先生に解説していただいた。それ以外の病態では、データの質と量が不十分であったり、結論が分かれる研究結果であったりと、解釈が容易でないものもあるが、術後患者における NPPV の有効性を大阪大学医学部附属病院の内山先生に、挿管人工呼吸後の離脱促進や再挿管予防効果については山形大学医学部附属病院の狩野先生に、そしてチャレンジな領域ではあるが、急性呼吸促進症候群（ARDS）に対しては京都府立医科大学附属病院の徳平先生に、胸部外傷や気管支喘息発作など救急患者に対しては岩手医科大学救命救急センターの松本先生に、市中肺炎に対する有効性と注意点は聖路加国際病院の仁多先生に、それぞれ執筆いただいた。さまざまな対象疾患・病態における NPPV の適応、有効性、注意点などが最新のデータをもとに解説されている点に注目していただきたい。

NPPV という言葉が最も頻繁に使用されている昨今ではあるが、実は、いまだに言葉の定義がきちんと定められていない。そのため、混同された解釈や紛らわしい表現となっているものも少なからず存在する。本特集では、非侵襲的人工呼吸（noninvasive ventilation : NIV）を大きな括りとし、その中に PEEP だけを使用する CPAP、PEEP と PS を使用する NPPV が含まれるという理解でそれぞれの表現方法を統一した。例えば、胸郭外から陰圧ないし陽陰圧を用いて行われる呼吸管理も NIV の中に含まれると考えてよいであろう。

1980 年代から使用され始めた mask CPAP から、PS を併用する mask PSV（NPPV）へと変遷し、NIV は世界中に広まっていった。特に NPPV は、急性期の患者に適応した NPPV 専用人工呼吸器の登場と快適なインターフェースの開発により、急性期呼吸不全治療の方向性を大きく変え、患者アウトカムの改善に寄与してきた。標準的治療法であった気管挿管を用いた侵襲的人工呼吸を NPPV を利用することで回避するというコンセプトが、当時、実に斬新であったことは言うまでもない。これほどまでに人類の健康に貢献した呼吸療法は、ARDS に対する低容量換気の効果をはるかに上回るものでないかと、NPPV の開発・研究・普及に努力してきたすべての人達を称賛したい。

さいごに、今回の特集をまとめるにあたって、読者の NPPV に対する理解が今までに増して深まり、各々の知識がアップデートされ、日本における急性期呼吸不全患者の治療成績が更に向上することを願っている。

本稿の著者には規定された COI はない。